

# 明代初期の八股文について (3)

## The Eight-legged Essay in the early Ming Dynasty (3)

滝 野 邦 雄  
Takino, Kunio

### ③于謙

于謙（字は廷益，号は節菴。諡は肅愍，萬曆中に忠肅に改められる。浙江錢塘の人。洪武三十一年〔一三九八〕～天順元年〔一四五七〕。永樂十九年辛丑科〔一四二一〕三甲九十二名の進士）は，宣徳の初めに御史に任官した後，河南・山西の巡撫を歴任し，英宗の正統十三年（一四四八）に兵部左侍郎となる。土木の変の時，景帝を擁立し，和議を成立させる。しかし，英宗が復位すると，讒言をうけ棄市される。

俞長城は，次のように述べる。

明の洪武乙丑〔十八年〔一三八五年〕〕より建文の末に逮ぶまで，其の間の劉〔基〕・方〔孝儒〕・黃〔子澄〕・解〔縉〕の諸君子 皆な傳文有り，然れども率ね多く觀ず。獨り風氣の樸なるのみに非ず，亦た靖難の兵 起こるに由り，散失する者多ければなり。永樂十九年（一四二一），忠肅（于謙）

始めて進士と成り，其の文 略ぼ盛んなり。今，傳うる所の四首を〔『可儀堂一百二十名家制義』に〕録す。或いは相を論じ，或いは兵を論じ，或いは佞を誅して罪を討つ。毎篇 古文の一則に當れり。〔伝えられる四首の八股〕文 此の如ければ，亦た過多なるものを羨むこと無し。忠肅（于謙）の古文 之を『三異人集』①に列す。時文は獨り成家（流派を形成する）なり。冤を受くるに慘なりと雖も，即ち此れ亦た目を瞋（おおきくひらく）す可し。其の文に至るに，英風勁節（高尚な風格と強固な氣節） 楮間（紙面）に躍露す。殺機<sup>あら</sup> 已に見わるも，亦た必ずしも羣小（小人たち）を怨まざるなり。夫れ文山（文天祥） 忠肅（于謙）の志有りて功は克成せ<sup>じつげん</sup>

ず。忠肅（于謙） 文山（文天祥）の功有りて志は見諒（容認）されず。皆な千古の遺恨なり。然り而して立德・立言②・「允に文 允に武」<sup>まこと</sup>（『詩經』魯頌・泮水），曠世（空前の） 合轍（合致する）す。余（俞長城） 故に文山（文天祥）を以て宋に殿とし，忠肅（于謙）を以て明に冠たりとし，比して之を屬す。[きつと于謙とは] 諒に九原（よみじ）にて，亦た快と稱すと爲さん（俞長城「題于廷益稿」『可儀堂一百二十名家制義』卷之二・五十葉～五十一葉・「于廷益稿」条）。

①『四庫全書總目提要』に「明の李贄編……是の書 凡そ方孝孺の詩文十卷，于謙の奏疏四卷・文一卷・詩三卷，楊繼盛の奏疏・詩文各一卷，附録一卷なり。贄 各々之が評を爲す……」（卷一百九十二・集部四十五・總集類存目二・「三異人集二十二卷」条）。

②『春秋左氏傳』襄公二十四年に「大上は立德有り，其の次は立功有り，其の次は立言有り。久しと雖も，廢せず。此れ之を不朽と謂う」。

于謙の八股文を明代の始まりとするのが俞長城の考えである。また，王汝驤（字は雲衢，又た耘渠と称する。江蘇金壇の人）も，

先生（于謙） 永樂十九年〔一四二一〕の進士なり。制義の體に於いて，初めの初めと謂う可き者なり。其れ氣の奇・才の横・法の密，此の如きに至る。此の道の開宗嫡傳を見る可し。是の如し，是の如し（雍正元年〔一七二三〕序『明文治』不分卷・大學「其心休休 利哉」条・評）。

と評する。

俞長城の『可儀堂一百二十名家制義』には，四首の八股文が収められている。拙稿では，俞長城が，

一篇の虚摹の文字，遂句（句ごとに） 斤両（重み）有り。議論 確なり，風骨（風格） 峻なり，結構（文の構成） 嚴なり，氣象 大なり。此の文 先生の功と並びに傳う可し（俞長城「其心休休 利哉」評・『可儀堂一百二十名家制義』卷之二・五十三葉・「于廷益稿」条）。

と評する八股文を検討してみたい。題目は、『大學』のなかで、『書經』秦誓を引

用した箇所<sup>①</sup>の太字で示したところである。

秦誓曰、若有一个臣、斷斷兮無他技、其心休休焉、其如有容焉、人之有技、若己有之、人之彥聖、其心好之、不啻若自其口出、寔能容之、以能保我子孫黎民、尚亦有利哉、人之有技、娼疾以惡之、人之彥聖、而違之俾不通、寔不能容、以不能保我子孫黎民、亦曰殆哉（『大學』傳第十章・第十四節）。

[朱注] 秦誓、周書。斷斷、誠一之貌。彥、美士也。聖、通明也。尚、庶幾也。娼、忌也。違、拂戾也。殆、危也。

國家任相臣、以有容為利也、

夫相臣能容、而有技・彥聖<sup>①</sup>至矣、國家之利以此、

傳者以為、人君求賢則得士<sup>②</sup>、乃或以求者壅之、以其失于一人也<sup>③</sup>、則必察一人<sup>④</sup>之心、如秦誓所稱「斷斷無技者」可也、

彼所以象其心者曰、「其心休休焉、其如有容焉」、

① 有技・彥聖：題目に「人之有技、若己有之、人之彥聖、其心好之」。

② 人君求賢則得士：前漢・王褒「聖主得賢臣頌」に「君人者、勤於求賢、而逸於得人（人に君たる者は、賢を求むるに勤み、人を得るに逸ず）」（『文選』卷四十七）。

③ 一人：『書經』秦誓に「邦之杌隉、曰由一人、邦之榮懷、亦尚一人之慶（邦の杌隉（危機）は、曰に一人に由る、邦の榮懷も亦た尚お一人の慶なり）」。

④ 則必：『舉業辨字』（不分卷・接語辭第二・五葉）に「前事に就きて、直ちに後事を決するの辭なり」。

⑤ 『明文治』によって「一」字を補う。

夫才不窮于草野、窮于大臣、曰休休、蓋無所吐者<sup>①</sup>如有茹也、

才盡于登庸<sup>②</sup>、不盡于虛受<sup>③</sup>、曰休休、蓋無所拒者<sup>④</sup>如有納也、

① 無所吐者如有茹：『詩經』大雅・蒸民に「人亦有言、柔則茹之、剛則吐之、維仲山甫、柔亦不茹、剛亦不吐（人 亦た言う有り、柔なるは則ち之を茹い、剛なるは則ち之を吐く、維れ〔賢相の〕仲山甫は、柔なるも亦た茹わず、剛なるも亦た吐かず）」。

② 登庸：『書經』堯典に「帝曰、疇咨若時登庸（帝 曰く、疇か時に若うを咨いて登庸せん）」。

③ 虚受：『易』咸卦・大象に「象曰，山上有澤，咸。君子以虚受人」。

而有技彥聖，何不容之有，

見為容者，其容不廓，若寸才尺藝，皆自身之效靈，<sup>①</sup>則止成一己，而何者為容，

自謂容者，其容不真，若推賢好德，若中懷之莫喻，<sup>②</sup>則惟有一好，而何者為容，

故曰「若己有之」，

曰「不啻口出」，

其實能容盖如此，

① 『可儀堂一百二十名家制義』は，「而」字に作るが，『明文治』によって「則」字に改める。

② 中懷之莫喻：蘇武「詩四首」に「可以喻中懷（以て中懷<sup>おもひ</sup>を<sup>たと</sup>喻う可し）」（『文選』卷二十九）。

此何心耶，

寤寐而思，<sup>①</sup>彷彿于虞廷大禹之風，

側席而求，<sup>②</sup>伯仲于成周姬旦之義，

然則所謂「能保子孫黎民」，尚亦有利者，豈虚語哉，<sup>③</sup>

① 寤寐而思：『詩經』周南・關雎に「求之不得，寤寐思服」。

② 側席：『後漢書』章帝紀・「[建初五年] 夏五月辛亥，詔曰，朕思遲直士，側席異聞……」条の唐・章懷太子李賢等注に「側席，謂不正坐所以待賢良也」。

③ 豈虚語哉：『論語集注』微子・「大師摯，適齊……」条の朱注に「……豈虚語哉」。

天下多就，<sup>①</sup>在于一人，

天下歸心，<sup>②</sup>係于一心，

即以此實能容者利之也，

① 天下多就：『孟子』萬章上に「天下之士，多就之者……」。

② 天下歸心：『論語』堯曰に「興滅國，繼絕世，舉逸民，天下之民歸心焉」。

不自利以利國故量可受天下不使居位而立政亦無以保天下矣，秦誓知言哉<sup>④</sup>  
（俞長城・『可儀堂一百二十名家制義』卷之二・五十三葉・「于廷益稿」・「其

心休休 利哉」条)。

- ①『可儀堂一百二十名家制義』は、「愛」字に作るが、『明文治』によって「受」字に改める。
- ② 不使：『舉業辨字』（不分卷・轉語辭第三・十九葉）に「禁止の辭なり」。
- ③ 居位：『論語集注』爲政・「或謂孔子曰、子奚不爲政……」条の朱注に「……孔子引之、言如此則是亦爲政矣。何必居位乃爲爲政乎……」。
- ④ 知言：『孟子』公孫丑上・「曰、我知言」条の朱注に「知言者、盡心知性、於凡天下之言、無不有以究極其理、而識其是非得失之所以然也」。また、『孟子』公孫丑上・「何謂知言」条の朱注に程子を引いて「程子曰、心通乎道、然後能辨是非、如持權衡以較輕重、孟子所謂知言、是也」。

于謙は、この題目を「國家の相臣を任ずるは、容るること有るを以て利と爲すなり」と破く。「容（受け入れる）」に重点を置くのである。そして、承題で「夫れ相臣の能く容れ、而して「有技」・「彦聖」の至るなり、國家の利は此を以てす」と承けて、「容（受け入れる）」の効能を述べる。

起講で、「傳者 以為らく、人君 賢を求めて則ち士を得。乃ち或いは求むる者を以て之を壅ぐは、其の一人に失うを以てするなり、[そういうことなので] 則ち必ず一人の心を察すること、秦誓の稱する所の「斷斷無技者」の如くすれば可なり。彼の其の心を象る所以の者は、「其心休休焉、其如有容焉」と曰う」として、人を得られないこともあるが、それは一人に影響される。そのため、「斷斷無技者」のようにすればよいと言う。

提股で、「夫れ才は草野に窮まらず、大臣に窮まれば、休休と曰う、盖し吐く所の者無ければ茹うこと有るが如きなり／才は登庸に盡き、虚受到盡きざれば、休休と曰う、盖し拒む所の者無ければ納るること有るが如きなり」といい、題目の「休休焉」の説明をする。そして、「有技・彦聖 何の容れざることを之れ有らん」と出題をおく。

中股で、「見て容ると爲す者は、其の容るるは廓ならず、寸才尺藝の皆な自身の效靈なるが若きは、則ち止だ一己に成るのみ、何者をか容ると爲さん／自

ら容ると謂う者は、其の容るるは真ならず、賢を推し徳を好むが若きも、中懷<sup>おもひ</sup>の喩<sup>たと</sup>うる莫きが若きは、則ち惟だ一好有るのみ、何者をか容ると爲さん／故に「若己有之」と曰い／「不啻口出」と曰う／其の實に能く容るるは蓋し此の如し」といい、題目の「若己有之」と「不啻〔若自其〕口出」とを解釈する。そして「此れ何れの心なるや」と過接をおく。

後股で、「寤寐して思い、虞廷大禹の風を彷彿とし／側席して求め、成周姫旦の義に伯仲す／然らば則ち所謂ゆる「能保子孫黎民」は、尚お亦た利有る者なり、豈に虚語ならんや」といい、題目の「若己有之」と「不啻口出」と「能保子孫黎民」との説明をする。

收股で「天下の多就は、一人に在り／天下の歸心は、一心に係る／即ち此れ實に能く容るる者を以て之を利とするなり」とのべ、人を得ることは個人に関わるものであるとする。

大結で「自ら利せず<sup>みずか</sup>以て國を利す、故に天下を受く可きを量り、位に居り〔そのことだけで〕政を立たしめず、亦た以て天下を保つことも無し。秦誓は知言なるや」と自己の意見を述べる。

こうしてみると、于謙の八股文も、八股文としての形式は整っているものの、内容としては、經書を用いて題目を解説しているといえるのではないだろうか。

#### ④薛瑄

薛瑄（字は徳温，号は敬軒，諡は文清。山西河津の人。洪武二十二年〔一三八九〕～天順八年〔一四六四〕。永樂十九年辛丑科〔一四二一〕二甲十四名の進士）は、宣徳年間に御史になり、宦官の王振に逆らい、極刑を言い渡されるものの許される。景帝が即位すると大理寺丞に復歸し、南京大理卿となる。英宗が復辟すると、禮部右侍郎を拝して翰林院學士を兼ね内閣に入るが、すぐに辭職し、郷里で講學に専念する。

俞長城は、薛瑄を王陽明と比較した上で、薛瑄の八股文を「簡樸（素朴）にして、極めて醇なりて、疵無し」と評する。

明の時の理學 首に文清（薛瑄）を推す。文清（薛瑄）の『讀書錄』・『河汾集』は學者 之を宗とす。夫れ文清（薛瑄）を師とする者は必ず文成（王守仁）<sup>しりぞ</sup>を誦け、文成（王守仁）を師とする者は亦た文清（薛瑄）<sup>しりぞ</sup>を誦く。文清（薛瑄）の學は踐履を主とし、其の程 緩にして則を踰えず。文成（王守仁）の學は會悟を主とし、其の途 捷にして禪に入り易し。且つ無極の説は考亭（朱子） 動を兼ね、象山（陸） 靜を專にす。考亭 全にして、象山 偏るなり。一貫の傳は、子輿（曾參） 行より入り、子貢（端木賜） 知より入る。子輿 實にして、子貢 虚なり。論者 云う、敬軒は考亭を宗とし、陽明は象山を宗とす、と。吾（俞長城） 則ち曰く、文清（薛瑄）は子輿に似たり、文成（王守仁）は子貢に似たり。文清（薛瑄）の稿 俱に簡樸（素朴）にして極めて醇なりて疵無し。之を『可儀堂一百二十名家制義』に<sup>しる しかい</sup>録し以て理學の正を誌す云う、と（俞長城「題薛敬軒稿」『可儀堂一百二十名家制義』卷之二・六十葉～六十一葉・「薛敬軒稿」条）。

ここでは「精細渾全として深心體認の作なり」（『欽定四書文』欽定化治四書文・大學・「身有所忿懣 八句」評・四葉）と評された薛瑄の八股文を検討してみたい。題目は、『大學』傳第七章・第一節の太字で示した箇所である。

所謂修身在正其心者，身有所忿懣，則不得其正，有所恐懼，則不得其正，有所好樂，則不得其正，有所憂患，則不得其正，

〔朱注〕忿，弗粉反。懣，敕值反。好・樂，竝去聲。程子曰，身有之身，當作心。○忿懣，怒也。蓋是四者，皆心之用，而人所不能無者。然一有之，而不能察，則欲動情勝，而其用之所行，或不能不失其正矣。

惟心<sup>①</sup>之用有不察，故不能不失其正<sup>②</sup>也，  
蓋喜怒哀懣<sup>③</sup>懼，貴乎隨感而應也，豫有之而不察，心欲其正得乎，  
且夫人之一心，有體焉有用焉，

① 心之用：題目<sup>④</sup>の朱注に「蓋是四者（忿懣・恐懼・好樂・憂患），皆心之用，而人所不能無者」。

② 不能不失其正：題目<sup>①</sup>の朱注に「或不能不失其正矣」。

③ 隨感而應：『孟子集注』公孫丑上・「孟子曰、人皆有不忍之心」条の朱注に「惟聖人全體此心、隨感而應。故其所行、無非不忍人之政也」。また、『孟子集注』離婁下・「禹稷當平世、三過其門而不入」条の朱注に「聖賢之心、無所偏倚、隨感而應、各盡其道」。

④ 有之而不察：題目<sup>②</sup>の朱注に「然一有之、而不能察」。

性蘊于中而未發者、則爲渾然之體、

情見乎外而已發者、則爲燦然之施、

是故

忿懣者、怒心之發而爲情者也、人孰無怒乎、怒在物可也、在心不可也<sup>①</sup>、苟忿懣之心、一發而不察<sup>②</sup>、則反爲情欲所牽、于是乎有不當怒而怒者矣、奚其正<sup>③</sup>、恐懼者、畏心之發而爲情者也、人孰無畏乎、畏在理可也、在心不可也<sup>④</sup>、苟恐懼之心、一發而不察、則反爲利害所惑、于是乎有不當畏而畏者矣、奚其正、

① 怒在物可也、在心不可也：『論語集注』雍也・「哀公問、弟子孰爲好學、孔子對曰、有顏回者、好學、不遷怒」条の朱注に「程子曰、顏子之怒、在物不在己、故不遷」。

② 一發而不察：題目<sup>③</sup>の朱注に「然一有之、而不能察」。

③ 奚其正：『論語』子路に「子路曰、有是哉、子之迂也、奚其正」。

④ 畏在理可也：『孟子集注』梁惠王下・「齊宣王問曰、交隣國有道乎……以小事大者、畏天者也」条の朱注に「天者、理而已矣、大之字小、小之事大、皆理之當然也、自然合理、故曰樂天、不敢違理、故曰畏天……」。

至於

喜心所發<sup>①</sup>、則爲好樂之情、人不能無也<sup>②</sup>、使得其道、而心果何所累哉、苟或一于好樂而不察、則邪妄之誘引、將無所不至矣<sup>③</sup>、又奚其正、慮心所發<sup>④</sup>、則爲憂患之情、人亦不能無也、使中其節、而心果何所繫哉<sup>⑤</sup>、苟或一于憂患而不察、則顧忌之惶惑、將無所不至矣、又奚其正、

① 心所發：『大學章句』經第一章第四節条の朱注に「心者、身之所主也、……意者、心之所發也」。

② 人不能無也：題目<sup>④</sup>の朱注に「蓋是四者（忿懣・恐懼・好樂・憂患）、皆心之用、而人所不能無者」。



③ 將無所不至矣：『大學章句』傳第六章・第二節に「小人閒居爲不善，無所不至」。

④ 中其節：『中庸章句』第一章・第四節に「喜怒哀樂之未發，謂之中，發而皆中節，謂之和」。朱注に「喜怒哀樂，情也。其未發，則性也。無所偏倚，故謂之中，發皆中節，情之正也，無所乖戾，故謂之和」。

⑤ 心果何所繫哉：『論語集注』里仁・「子曰，唯仁者能好人，能惡人」条の朱注に「游氏曰，好善而惡惡，天下之同情，然人每失其正者，心有所繫而不能自克也……」。

是其物之未來也，而迎之以意・必，已失乎渾然大公之體，  
及其物之既往也，而留之以固・我，又乖乎燦然順應之常，  
此情之所以不制，

心之所以不正，

欲正心者烏可以不察哉<sup>⑦</sup>（『制義文統類編』十四冊・「身有所忿懣則不得其正有所恐懼則不得其正有所好樂則不得其正有所憂患則不得其正 薛瑄」条／『欽定四書文』〔欽定化治四書文・大學・「身有所忿懣 八句」条・三葉〕とは少し異同がある）。

① 物之未來：『朱子語類』（卷十六・大學三）に「……其所以係於物者有三，或是事未來，而自家先有這箇期待底心，或事已應去了，又却長留在胸中不能忘，或正應事之時，意有偏重，便只見那邊重，這都是爲物所係縛，既爲物所係縛，便是有這箇物事，到別事來到面前，應之便差了，這如何會得其正……」。

② 意必：『論語集注』子罕・「子絕四，毋意，毋必，毋固，毋我」条の朱注に「……意，私意也。必，期必也。固，執滯也。我，私己也。四者相爲終始，起於意，遂於必，留於固，而成於我也。蓋意・必常在事前，固・我常在事後……」。

③ 大公之體：『二程全書』（卷五十六・「答橫渠張子厚先生書（定性書）」）に「故君子之學，莫若擴然大公，物來而順應」。『近思錄』卷二も同じ。

④ 物之既往：①参照。

⑤ 固我：②参照。

⑥ 順應之常：③参照。

⑦ 欲正心者烏可以不察哉：題目朱注に「然一有之，而不能察，則欲動情勝勝，而其用之所行，或不能不失其正矣」。

趙國麟（字は仁圃。山東泰安の人。？～乾隆十六年〔一七五一〕。康熙四十八

年〔一七〇九〕己丑科三甲八十名の進士の『制義文統類編』（雍正六年〔一七二八〕刊）は、この八股文を次のように解説する。

先ず、題目については、

正心修身の義を釋す。心の正しからざる所以の故を論じて、其の事を序す。心の正しからざる所以の故を知りて、心を正すの義 識る可きなり（『制義文統類編』十四冊・「身有所忿懣則不得其正有所恐懼則不得其正有所好樂則不得其正有所憂患則不得其正 薛瑄」条・薛二）。

と理解する。

続けて、題目の本文についての朱注が「蓋し是の四者は、皆な心の用にして、人<sup>なみ</sup>無する能わざる所の者なり」として「用」についてのみ言及し、『大學或問』では「體」・「用」とともに述べていることを説明する。朱注は単に「心の用」とのみ言っているが、「體」はすでに其の中に存在し、「用」が「不正」であり、「體」とは関係がないという意味ではないというのである。

此の節の本註は単に「〔心の〕用」と言う。『或問』は、則ち先ず「體」を言い、而して後に「用」に及ぶ。蓋し「心は體・用を兼ね」（『朱子語類』卷五・性理二に「心兼體用而言」）、「動・静を貫けり」（『朱子語類』卷六十二・中庸二に「如說性之用是情，心卽是貫動静，却不可言性之用」）。此の節の〔題目の〕四段は、即ち是れ『中庸』（第一章・第四節）の「喜怒哀樂，發而皆中節」の反面なり。単に已發に就きて言う，故に「用」と曰う。然る所以の者は、其の未發の時に當りて、渾然と「中」に在り、〔また〕聖人の冲漠無朕（むなしく何のきざしも見えない）なる者なり。固より「未だ窺測し易からず」①。常人にして「寂然（しずか）として動かず」（『周易』繫辭傳上）②に即くも、亦た得失の言う可きもの無し。惟だ動にして已發し、始めて以て其の正・不正を見ること有るのみ。是れ〔注に〕単に「〔心の〕用」とのみ言うも、「體」已に其の中に在り。「用」の正ならずして、遂に「體」に関する無しと謂うに非ざるなり。蓋し天下に「體」の正にして「用」の未だ必ずしも盡くは正ならざる者有り。故に〔未發の際に行う〕

存養の功ありて、又た當に繼ぐに「已發の際に行う」省察を以てすべし。未だ「用」の正ならずして、尚お「體」の能く正なりと云う者有らざるなり。故に「未發の際に」省察する能わざる者は、斷じて能く「已發の際に」存養すと云う可からざるなり。然らば則ち本註は白文の當に然るべくして、然る所以は自ずから其の中に在るを發明す。『或問』も又た本註の然る所以にして白文の然る所以を發明すること、亦た愈々明らかなり（同上）。

① 未易窺測：『論語集注』學而・「子禽問於子貢、夫子至於是邦也」条の朱注に「聖人過化存神之妙、未易窺測」。

② 寂然不動：『近思錄』卷一に「伊川先生曰、喜怒哀樂之未發、謂之中、中也者、言寂然不動者也」。『二程全書』卷二十八も同じ。

このように、題目が「用」だけでなく「體」のことも兼ねていることを確認して、薛瑄の八股文を次のように解説する。

此の文 前（起講）は心に「體」・「用」有るより説き起こし、未發を以て已發を引き、四者（忿懣・恐懼・好樂・憂患）の「用」を領出し、末に復た「大公之體」と「順應之常」とを収め到り、『或問』・本註と相い發す。眞の儒者の講學の文なり（同上）。

起講で「且<sup>そも</sup>、夫れ人の一心は、體有り用有り」と説き起こして、心に「體」と「用」とがあることを言う。

捉股では、「性 中に蘊<sup>つ</sup>みて未發なる者なれば、則ち渾然の體と爲す／情 外<sup>あら</sup>に見われ已發なる者なれば、則ち燦然の施と爲す」と言つて、心の「性」・「情」を「未發」・「已發」を用いて説く。

中股と後股では、「忿懣は、怒心の發して情と爲る者なり、人 孰れか怒無けんや、怒の物に在るは可なり、心に在るは不可なり、苟し忿懣の心、一たび發して察せざれば、則ち反つて情欲の牽する所と爲る、是に于いて當に怒るべからずして怒る者有り、奚<sup>なん</sup>ぞ其れ正さん／恐懼は、畏心の發して情と爲る者なり、人 孰れか畏無けんや、畏の理に在るは可なり、心に在るは不可なり、苟し恐懼の心、一たび發して察せざれば、則ち反つて利害の惑する所と爲る、是に于いて當に畏

るべからずして畏る者有り、<sup>なん</sup>奚ぞ其れ正さん／喜心の發する所は、則ち好樂の情と爲す、人 無みする能わざるなり、其の道を得しむれば、心 果して何の累する所ならんや、苟し或いは好樂に一にして察せざれば、則ち邪妄の誘引、將に至らざる所無し、又た<sup>なん</sup>奚ぞ其れ正さん／慮心の發する所は、則ち憂患の情と爲す、人 亦た無みする能わざるなり、其の節に中らしむれば、心 果して何の繋る所ならんや、苟し或いは憂患に一にして察せざれば、則ち顧忌の惶惑、將に至らざる所無し、又た<sup>なん</sup>奚ぞ其れ正さん」と言つて「忿懣」・「恐懼」・「好樂」・「憂患」の四者の「用」について述べる。

そして收股で、「是れ其の物の未だ來らざるや、之を迎うるに「意」・「必」を以てすれば、已に渾然たる大公の體を失う／其の物の既に往くに及ぶや、之を留むるに「固」・「我」を以てすれば、又た燦然たる順應の常に乖けり」と言い、『大学或問』や題目の箇所<sup>つな</sup>の朱注などを補っているという。

特に趙國麟が「真の儒者の講學の文なり」というのは、收股の箇所が、『朱子語類』（卷十六・大學三）の「其の物に係がる所以の者に三有り」と『論語集注』子罕・「子絶四、母意、母必、母固、母我」条の朱注の「蓋し「意」・「必」は常に事の前に在り、「固」・「我」は常に事の後に在り」とに基づいて書かれたと理解したためであると考えられる。

『欽定四書文』では、この八股文を次のように評する。

「心は體・用を兼ね」（『朱子語類』卷五・性理二）、「意」と同じからず。「有所」は、「動」の處に在りて見ると雖も、病根は則ち「靜」なる時に已に伏す。故に次節の註に「敬以直之（敬以て之を直くす）」とあり、總註に「密察此心存否（密かに此の心の存否を察す）」云云とあるに及ぶ。皆な「動」・「靜」を合わせて之を言う。精細渾全（精緻で完全である）として深心（熟考）體認するの作なり（『欽定四書文』欽定化治四書文・大學・「身有所忿懣 八句」評・四葉）。

題目の「有所」を「心の用なり」と注していることから、「不正」が起こるのは「動（用）」の時であると理解してしまいがちである。しかし、「病根」は「靜

(體)」の時にすでにひそんでいる。だから、次節の第七章第二節の朱注や『大學』第七章の総注は、「動」・「静」を合わせて述べる。そこで、この薛瑄の八股文も「動(用)」だけでなく、「静(體)」も考えに入れて議論を展開する。そのため「精細渾全(精緻で完全である)として深心(熟考)體認するの作」となっているというのである。

薛瑄の八股文は、提股で心の「性(静/體)」・「情(動/用)」を説明し、中股と後股とで題目にある忿懣・恐懼・好樂・憂患の四者(「心の用」)を解釈し、收股で「體」・「用」とを解説していると、『欽定四書文』<sup>(1)</sup>の評者は考えた。つまり、「體」・「用」を柱としてこの八股文が書かれたと理解しているのであろう。

それに対して、趙國麟は、外の事物からの働きかけに応じて忿懣・恐懼・好樂・憂患する所が有る(「有所」)時の段階は、「未来」・「既至(現在)」・「已往(過去)」の三層の意味が重なっていると理解すべきであり、薛瑄の八股文は、それをふまえて書かれているという。「體」・「用」を柱としているだけではなく、「有所」を更に詳しく分析して書かれていると考えるのである。

「有」字は須く「未来」・「既至(現在)」・「已往(過去)」の三層を兼ねて説くべし。盖し『朱子語類』でいう豫期(期待)・偏重・留滯は皆な「其の正を得ざる」(題目)の病なり……此の〔薛瑄の八股〕文は「一發而不察」〔などで用いられる〕四つの「一」字・「有不當怒而怒者」・「將無所不至」等の句、未だ明らかに三層を言わずと雖も、三層の意義 渾然包舉(一体となって包括)せざるは無し。末二比(收股)に至りて、単に「未来」・「既往」を以て收(收股)を作る。[そうしたのは]是れ中四比(中股)を以て専ら當下(現在)の發して節に中らずを言いて、未来・過去を包み、[そして]末後(收股)に方に明らかに未来・過去を〔「未来」・「既往」という

(1)『欽定四書文』では、收股の出比の「是其物之未來也、而迎之以意・必、已失乎渾然大公之體」に「仍お「體」の一層を補す」(『欽定四書文』欽定化治四書文・大學・「身有所忿懣八句」条・三葉)と旁批がある。すると、出比で「體」について述べ、對比の「及其物之既往也、而留之以固・我、又乖乎燦然順應之常」で「用」のことに言及していると理解したのである。

言い方で] 補し、當下（現在）を包むに似たればなり。此の如く體會すと作すは、亦た自ずから碍げなし（同上）。

趙國麟は、なぜ「未来」・「既至（現在）」・「已往（過去）」の三層の意味が重なっていると理解すべきだとしたのかを漠然と次のように説明する。

細かに此の文を讀むに [以下のようにである]。「人孰無怒乎（人孰れが怒

- ✓（2）これは、『朱子語類』において、心が外物と関係した時の状態を「事未來」・「事已應去了」・「正應事之時」の三つに分けて述べていることによる。

敬之（朱在）「心有所好樂則不得其正」章を問いて云う、心は一毫の偏倚有る可からず。才は一毫の偏倚有りて、便ち是れ私意なり。便ち浸淫（染まってゆく）して已まず、私意は反って大いに身己（我が身）に似たり、所以に「[心焉に在らざれば] 視れども見え、聴けども聞こえず、食えども其の味を知らず」（『大學』傳第七章・第二節）と。曰く、この下は是れ心正しからざれば、以て身を修む可からざるを説く。下章の「身不修不可以齊家」の意と同じ。故に「莫知其苗之碩（其の苗の碩いなるを知るもの莫し）」（『大學』傳第八章・第二節）と云う。「視」は是れ身上に就きて説く。心一物有る可からず、外面萬變に醜酢（対応）し、都て其の分限（本分）に随いて應去し、都て自家の心事に關せず。才は物に係がり、心は便ち其の動く所と爲す。其の物に係がる所以の者に三有り。或いは是れ事未だ來たらず、自家先ずこの期待する底心有り、或いは事已に應去し了り、又た却って長く胸中に留在して忘るる能わず、或いは正に應事の時、意偏重有り、便ち只だ那邊の重きを見るのみ、これ都て是れ物の係縛する所と爲す。既に物の係縛する所と爲れば、便ち是れこの物事有り、別事の面前に來り到るに到るに、之に應じて便ち差あり了り、これ如何に其の正を會得せん。聖人の心、整然虚明にして、纖毫の形迹無し。一たび事物の來るを看れば、若小若大（大きいのも小さいのも）、四方八面（到るところ）、物に随い應ずるに随わざるはなし。此の心元とより曾てこの物事有らず。且つ敬以て君に事うるの時、此の心其の敬を極むるが如し。當時更に親の面前に在る有れば、也た須ず其の親を敬す。終に不成や君を敬するは、但只だ君を敬し、親は便ち須ず管り得ずと説かんや。事事都て此の如し。聖人の心體廣大虚明にして、物物遺す無し。賀孫（『朱子語類』卷十六・大學三）。

- ✓（3）趙國麟と同世代の王澐（字は若林、又の字は若霖、号は虚舟。江蘇金壇の人。康熙七年〔一六六八〕～乾隆四年〔一七三九〕。康熙五十一年〔一七一二〕壬辰科二甲三十一名の進士）は『大學困學錄』で、次のように述べる。

〔正心修身傳口義〕……夫れ喜怒哀懼の一たび動く所有りて、又復た方に發するの始めに于いて密に體察の功を加うる能わざれば、則ち其の之に應ずる所以の者は、自ずから偏倚にして事物の本然の理と其の當然の則とに合わざる有り。其れ未だ至らざるや、則ち先ず期待の心有るを免れず。其の既に至るや、則ち或いは偏重の處有るを免れず。其れ既に往くや、又た中に留滯して忘るる能わざるを免れず。是れ皆な察せざるの故なり（『大學困學錄』傳第七章・三葉・「正心修身傳口義」条）。

心の状態が、喜怒哀懼として發するその時に察しなければ、物事の働きかけに応じて偏倚となってしまう。その偏倚となる弊害として、「未至」における「期待」・「既至」における「偏重」・「既往」における「留滯」が現れるという。

無きか)」は、「無」字を以て「有」字を振るう。早に『大學或問』において] 槁木死灰の一層①を<sup>も</sup>將って掲げ過<sup>まさ</sup>ごせば、方に註中の「人 無みする能わざる所の者」句の妙を知る。「怒在物可也（怒の物に在るは可なり）」、此の句 是れ反って「有」字を照らし、有りと雖も無きが如きを言うなり。「在心不可也（心に在るは不可なり）」、此の句は是れ「有」字を正説（正面から説く）し、當に有るべからずして有る者を言うなり。當に有るべからずして有るは、「一發而不察（一たび發して察せざる）」に起く。此れを之れ「豫期（未来）」と謂う。「一發而不察（一たび發して察せざる）」者は、必ず「欲動き情勝り」②、「于是乎有不當怒而怒者矣（是に于いて當に怒るべからずして怒る者有り）」に至る。[そして、その]「不當怒而怒（當に怒るべからずして怒る）」は、「當下（現在）」に在り、固よりはれ「偏重」なり。即ち已に過ぐる「過去のことであつて」も、又た豈に能く釋然とせんや。摠（總）じて之を當に有るべからずして有りと云う。故に「在心不可也（心に在るは不可なり）」と曰う。[この] 一股の文字は、「有」字に従いて起頭し、「有」字を貫き到りて結煞す。未来・當下・已往の三層は、包括され已に盡くせり（同上）。

①『大學或問』の第七章「或問、人之有心、本以應物、而此章之傳、以爲有所喜怒憂懼、便爲不得其正、然則其爲心也、必如槁木之不復生、死灰之不復然、乃爲得其正耶」。

②題目の朱注に「然一有之、而不能察、則欲動情勝、而其用之所行、或不能不失其正矣」。

中股の出比の「忿懣者、怒心之發而爲情者也、人孰無怒乎、怒在物可也、在心不可也、苟忿懣之心、一發而不察、則反爲情欲所牽、于是乎有不當怒而怒者矣、奚其正」の「人孰無怒乎」・「怒在物可也」・「在心不可也」を詳しく検討してみると「有」字をいろいろな角度から述べている。そして、「在心不可也」は、「當に有るべからずして有る者」のことを言う。これは、「一たび發して察せざる」に起因する。この「一たび發して察せざる」状態を「豫期（未来）」とする。また、

この時、「欲動き情勝り」で、「當に怒るべからずして怒る」状態が導かれてくる。この状態が「當下（現在）」であり、「偏重」となっているのである。たとえその状態が過去においてのことであっても、釈然とできないのである。これをまとめ「當に有るべからずして有る」とするというのである。このように、趙國麟は「一たび發して察せざる」に「未来」・「既至（現在）」・「已往（過去）」の三層の意味があると理解したため、薛瑄のこの八股文には三層の意味を重ねてであると解釈したのであろう。

続けて、次のように述べる。

末後（收股）の二比は方に明らかに「未来」・「既往」より收め到りて、「有」字を正言（正面から言う）せざるも、頭より尾に至るまで、皆な是れ「不正」なり。而して中間の「當下（現在）」の「不正」は、更に言を待たざるなり。此の如き體會は方に『語類』中の心の「物に係がる者に三有り」（『朱子語類』卷十六・大學三）より知る。[これらは] 摠（總）じて本註の「一に之有り、察する能わず」一句の中に在り。而して此の文は「在物可也」・「在心不可也」の二語を加えて、[朱注の]「一に之れ有り、察する能わず」句の包む所の理をして、分外（特に）に分明にす。真に是れ傳註に功有るの文なり。但だ此の二語は亦た只だ是れ本註の一つの「然」字①の中の具ふる所の意なり。朱子の無みする所にして、強いて増す者に非ざるなり。甚だしきかな註の細讀せざる可からざるや（同上・薛二～薛三）。

①然：題目の朱注に「忿懣、怒也。蓋是四者、皆心之用、而人所不能無者。然一有之、而不能察、則欲動情勝、而其用之所行、或不能不失其正矣」。

收股の二股は「未来」・「既往」と言い、「有」字を正面から説いていないが、内容は最初から最後まで「不正」についてである。「當下（現在）」の「不正」については、言及しないものの、当然含まれている。そもそも「未来」・「當下（現在）」・「既往」の三層は、すでに朱注の「一に之れ有り、察する能わず」のなかに含まれている。この八股文は、そこに「在物可也」と「在心不可也」という



語を付け加えて、朱注の意味をさらにはっきりさせ、傳註に功績があるものとなっている。しかし、この語は薛瑄が勝手に作り出したものではなく、朱注の「然」字から導きだされたものであるという。

以上、検討したように、『欽定四書文』では、薛瑄のこの八股文を、「體（静）」・「用（動）」を柱として書かれたと理解する。また趙國麟によると、忿懣・恐懼・好樂・憂患の「有所」は、「未来」・「既至（現在）」・「已往（過去）」の三層の意味が重なっていると理解して解釈すべきだという。たしかに、收股にある「未来」と「既往」とからみると、『朱子語類』の「物に係<sup>つな</sup>がる者に三有り」を踏まえていると理解できる。ただし、薛瑄が趙國麟の指摘するように、三層の意味が重なっていることを意識して、この八股文を書いたのかどうかまでは判断できないのではないだろうか。<sup>(4)</sup> 清朝におけるこうした理解は、かなり詳しく朱子の著作を読み込んだ上で、八股文を書かなければ、試験官に認めてもらえないようになったことにもよるのではなかったのだろうか。

しかし、出典からすると、薛瑄のこの八股文は、注によってのみ題目を解説するのではなく、『大學或問』や『朱子語類』なども用いて書かれているが、その範囲から逸脱していないと考えられる。

(つづく)

(4) 「物に係<sup>つな</sup>がる者に三有り」の三層がすべて「不正」とかかわっているとせず、「豫期」は「静」に属しているとする解釈も存在していた。陸隴其（明・崇禎三年〔一六三〇〕～康熙三十一年〔一六九二〕）は、次のように言う。

『[四書]大全』に、朱子 物の繋がる所以の者に三有りと謂う。俱に「動」の時に在りて看る。『[四書]蒙引』に事 未だ至らずして之を豫期するは、即便<sup>すなわ</sup>ち是れ「動」なりと謂うは、最も妙なり。西山眞氏（眞德秀:宋・淳熙五年〔一一七八〕～宋・端平二年〔一二三五〕）・玉溪盧氏（盧孝孫）俱に豫期を以て「静」の時に屬して説くは、殊に混なり（康熙三十八年〔一六九九〕序『四書講義困勉録』卷之一・大學「所謂修身節」条・三十二葉）。

眞德秀と盧孝孫との解釈が、「豫期」を「静」の時のこととして理解していたため、清・陸隴其はその解釈を「殊に混なり」とするのである。